752-99
1200501594718
152
99

名勝長門峽の概況

山口縣発行

752
99

名勝長門峽の概況

山口縣

帝國圖書館藏

名勝

長門峽の概況

昭和十三年・帝國圖書館・藏

752
99

緒言

一本冊子は　名勝長門峽　探勝者の參考として刊行したものである

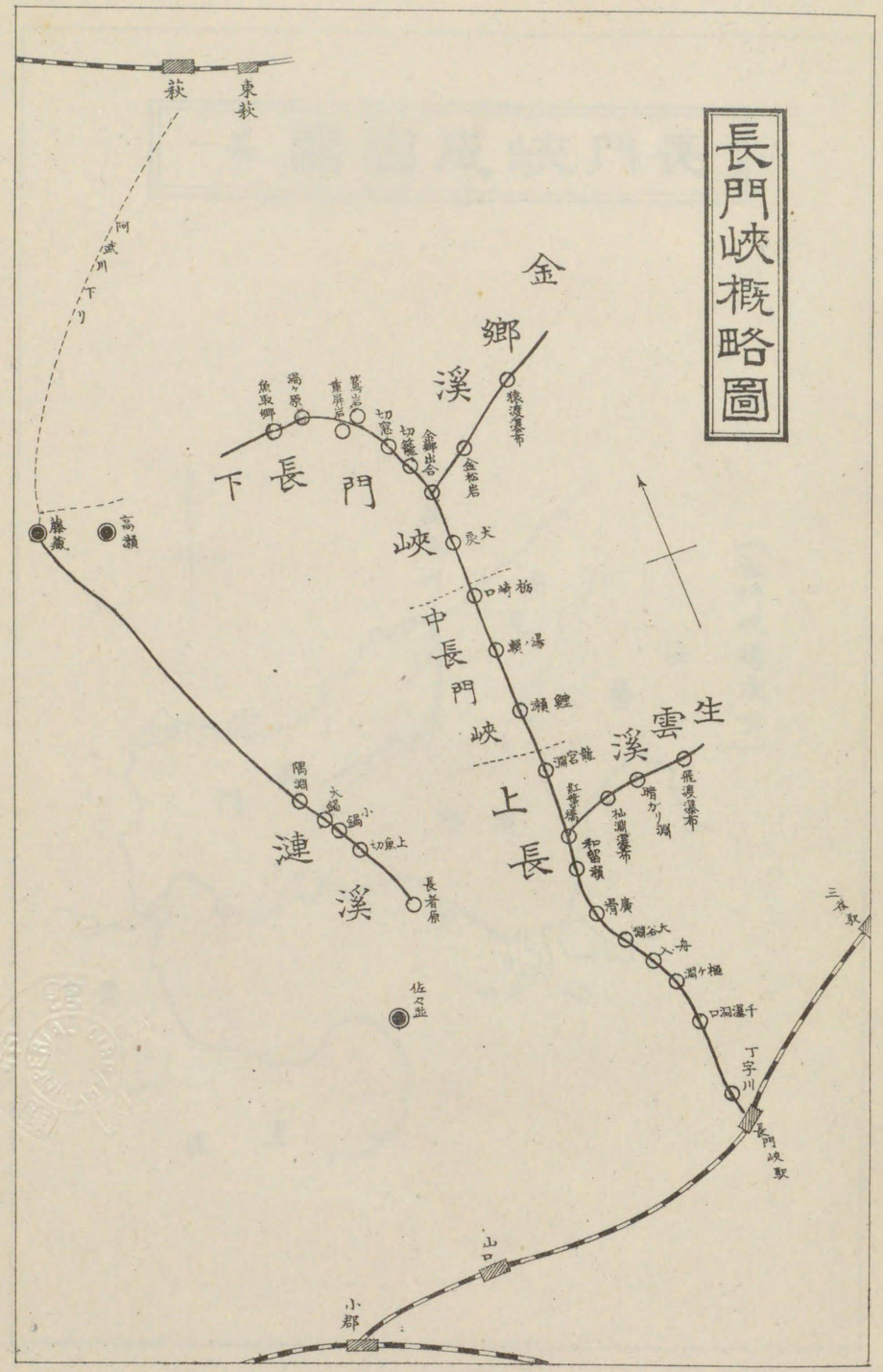
一本峽の探勝は阿武川の川岸を遡るを可とするものと、長門峽驛より川岸に沿ふて下るを是とするものと、議論容易に決せず、然れども奔湍激流の風景は下流より上流に向ふにあらざれば價値無しと云ふもの頗る有力なれども地勢上これまで長門峽驛を正門とし流れに沿ふて下る慣行あれば本冊子記載の順序も強て是に逆はざることゝなしたり

一本冊子は岩根史蹟名勝天然紀念物考査員の執筆せるものである。

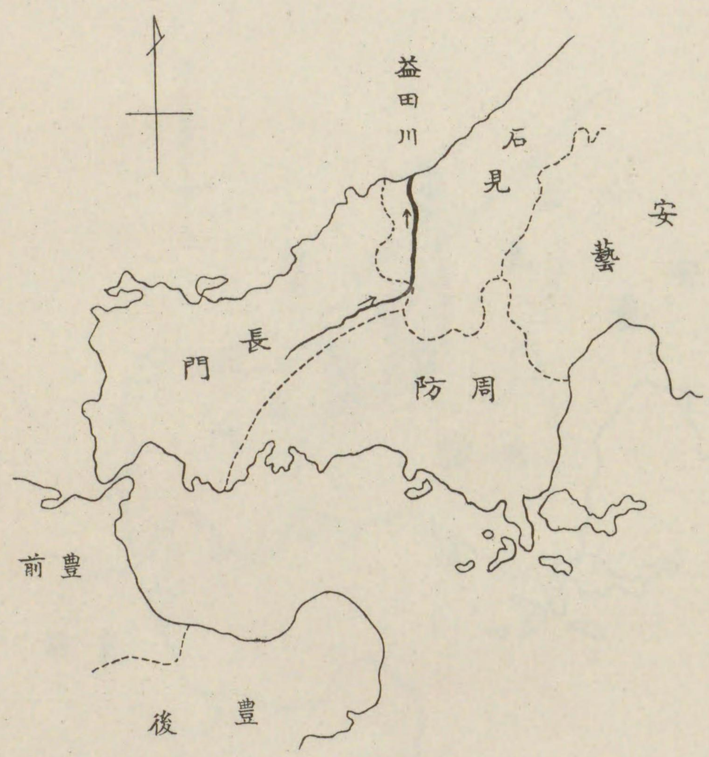
目次

長門峽の成因……一頁
長門峽の開發……三
長門峽內の概況……五
上長門峽……七
中長門峽……一一
下長門峽……一三
生雲溪……一五
金鄕溪……一七
漣溪……一九

長門峽概略圖

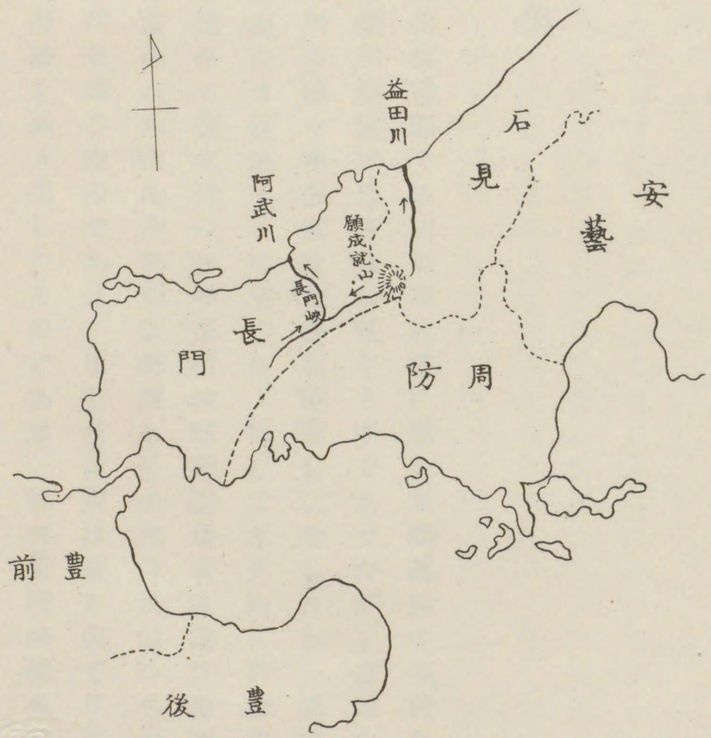

萩
東萩
阿武川下り
金郷溪
猿渡瀑布
金松岩
金郷出合
切籠
切窟
篤岩
青耳岩
渦ヶ原
魚取郷
下長門
峽
犬戻
栃ヶ崎
湯ヶ瀬
鯉瀬
龍宮淵
紅葉谷
和留瀬
廣滑
大谷
舟ヶ瀬
千畳淵口
丁字川
長門峽駅
三谷駅
生雲溪
飛渡瀑布
増ガ淵
柚淵瀑布
上長門峽
連溪
長者原
上魚切
小鍋
大鍋
隅淵
高瀬
棒瀬
佐々並
山口
小郡

長門峽成因圖 其一



（長門峽構成前）

長門峽成因圖 其二



（願成就山迸發ノ爲メ益田川、中斷セラル）

名勝長門峽の概況

長門峽の成因

周防長門の境を爲す木戸山に發源する川は東に流れ篠生、地福、德佐の各村を經て石見に入り津和野を經て益田附近で日本海に注ぐものであつたが、德佐の東方なる願成就山が迸發して川の略々中央部を完全に遮斷し二分したから願成就山より以西の川水は西方に向つて逆流するに至つた、而して木戸山に發源する川は以前の通り東に向つて流れて篠生村の今の長門峽驛所在地なる御堂原の水準が最も低いから東西兩方面の川水は此所で正面衝突をして北方に向つて流れ岩石を浸蝕して此所に丁字川を造つたのである、而して此川は萩を經て日本海に注ぐものと成り今日の長門峽を造り出したものである、故に長門峽構成の爲め

に其土砂は流されて萩三角洲を造つたものであるから長門峽と萩とは甚だ密接なる關係がある、若し往時願成就山が迸發しなかつたとすれば萩の土地は出來なかつたのであらう、御堂原に飯の山と呼ぶ巨大なる岩柱が川畔に兀出して居るが願成就山の迸發しなかつた以前には川は飯の山の南側を通り、同山の迸發後には岩柱の北側を通過するに至つて今日に至るのである

故に長門峽を知らんとするものは先づ篠生、地福、德佐各村に於ける川の流向や、願成就山や、益田川や、御堂原が此附近に於て水準が最低位にあることや、丁字川や、飯の山等に着眼する必要がある

願成就山は德佐驛の東方に當り長門、石見兩國境に近く釜を伏せたるが如き形狀であつて甚だ優美なる山勢である、此山は地質學上新しき噴出岩なる安山岩で場所に依りては角閃安山岩や頑火石安山岩として表はるゝ、此地方では之を德佐石と呼んで採堀して石材として所々に輸送し碑石、墓石、門柱、切石、石垣石等に使用する。

長門峽の開發

阿武川幹流中部は峽谷深く急湍連續し到所大小の岩石川床に出沒して川舟を通ずることが出來なかつた爲め峽中は古來杣夫獵夫の間に僅に知らるゝのみの所であつた、吉田松陰は松下村塾記の一部に「松下之爲邑、南帶大川、川之源溪間數十里人莫能窮云々」と記せるは今の長門峽に當れる部分を指せるのである

明治卅年頃陸地測量部は此地方を製圖し同卅五年六月、五萬分一の地形圖を出版したが該圖に依れば現在の長門峽に當る部分に記載しある地名は僅に龍宮淵、柄崎の二ヶ所のみなるも是れ本峽を測量した初である

同四十一年縣電の前身なる阿武川水電は水の取入口を設けんと探索中峽內の寫眞を撮影して人に頒つたことがある、是が本峽を世に紹介した初である

同四十四年英人ガントレット陸地測量部の地形圖に依り御堂原より山越しに龍宮淵附近及今の生雲溪を探り山口にて之を紹介したが、其時には今の金鄕溪、下長

門峽及漣溪は全く知らなかつた

大正六年防長新聞に長門耶馬溪と題して現在の上長門峽を紹介した者があつた、同七年には鐵道山口線は三谷驛迄開通し篠目驛より本峽入口まで行程四粁となつたから山口方面より探勝者漸次增加したれば同年五月篠生村の有志は龍宮溪探勝會を設け探勝者に便宜を計つた

同八年篠生村は本峽入口に新驛設置を請願した、本峽は斯く漸次世に知られんとする端緒を開いたが、惜哉峽內は通路無く人の近寄り難い所であつた

同九年岡村阿武郡長は上京の際高島北海を訪ひ阿武川峽谷開發を懇望した爲め同氏は本峽の開發は探勝道路開鑿の必要を說きたる爲め、保勝會を設置し先つ長門峽と命名し揮毫の畫百六十幅此金額壹萬五千五百圓を寄贈した、此資金を本峽道路費に充て大正十年二月十一日起工同年七月卅日竣功した、續で鐵道省は同年十月卅日長門峽驛を峽口なる御堂原に開設した

大正十二年三月七日史蹟名勝天然紀念物保存法に依り名勝長門峽として指定せられたれば爾來遠近の探勝者頓に增加するに至つた。

長門峽內の概況

長門峽は山口縣阿武郡篠生村、生雲村、川上村、福川村に於ける阿武川幹流中部及支流に跨る峽谷の總稱であつて堅牢なる石英斑岩の浸蝕谷である、石英斑岩は所々に玢岩之を貫き水に對する浸蝕の度合を異にするから柔軟なる部分は益々著しき浸蝕を受け硬き部分は殘存するから茲に變化に富める奇景を造り出したものである、本峽は川岸に斷崖絕壁を表はし其麓には階段狀浸蝕の跡を遺し、川床には到所に深潭及甌穴を作り瀑布、奔湍相續き傾斜緩かなる所には大小の奇岩出沒する、斷崖絕壁の主なるものに碁石岩、和留瀨絕壁、金松岩、切籠、切窓、十兵衞岩等がある、流水の力にて階段狀浸蝕を爲せるものに雛壇、畦の瀨等がある、深潭の主なるものに鱒淵、榧ヶ淵、舟淵、大谷淵、龍宮淵、隅淵、杣淵、暗がり淵等がある、奔湍の主なるものに馬の瀨、和留瀨、又の瀨等がある、代表的甌穴としては井淵、大鍋、小鍋等がある、瀑としては杣淵瀑、飛渡瀑、猿

渡瀑、魚切等がある、峽内の森林は主として雜木であつて原始的のものも現存し所々に鬱蒼たる狀態を保ち峽趣を貴からしむる、降霜の初期には山も谷も岩も鏡の如き深潭も見渡す限り滿目の萬物紅錦と美化して本峽獨特の光景を呈する、峽流中には鮎あり、鯉あり、鱒あり、鰻あり、石斑魚ありと云ふ有樣である、林間には樹梢に戯るゝ群猿を往々目擊することがある、峽内人烟と隔絶し到所、岩と水と樹木のみなれば空氣清透で探勝者の神心爲に爽快である、本峽指定區域全延長は幹道一〇粁、支道二粁、別に漣溪の一區域がある

長門峽地點表示上の便宜を計り分つて五區とする、即ち　上長門峽、下長門峽、生雲溪、金鄉溪、漣溪　これである

上長門峽は阿武川幹流の一部で出合淵の少しく下流より龍宮淵の北端迄の間

下長門峽は東長門峽の下流であつて柄崎口以西畦の瀨迄の間

生雲溪は阿武川の支流なる生雲川下流で紅葉橋より飛渡瀑迄の間

金鄉溪は阿武川の支流なる藏目喜川の下流で金鄉出合より猿渡瀑迄の間

漣溪は阿武川の支流なる佐々並の一部で上魚切、下魚切を包含する地域。

上長門峽

上長門峽とは長門峽驛の北二〇〇米の所にある丁字川出合溪の少しく下流より龍宮淵北端に至るの間にして全延長五粁である

長門峽驛前は篠生村御堂原にして飯ノ山と呼ぶ岩柱の東麓を過ぎ洗心橋と呼ぶ小橋を渡り行くこと少許にて丁字川がある、是れ德佐、地福、篠生三村に跨る略々東西に一直線の谷は御堂原が水準最低位にある爲め此地點に向つて東西兩方面よりの水は合流して直ちに北方に向つて流れ阿武川幹流となり長門峽の奇勝を構成せしものである、丁字川は其合流點が丁字形なるを以て此名を得たるものであつて此所に出合淵を造る、常時は平凡なる狀態なるも洪水の際は驚くべき勢を以て水は正面衝突を爲し壯觀である、丁字川より下流一粁の間は流水緩かであつて川床には大小の奇岩點在するのみで變化は少いが朝霧の深い所である、鱒淵と呼ぶ所は流れが西に轉せんとする所にある深潭であつて古來晩秋

の候に巨大なる鱒は上り來つて淵内を廻游することあれば此名がある所以である、此淵より下流は川床急傾斜を爲して大小の岩石流れを横斷し奔湍激流を造り或は懸つて瀑を作る、川の兩岸は斷崖絶壁であつて是迄靜穩なりし光景は忽ち豪壯雄大なる奇景と一轉す、馬の瀨と呼ぶ奔湍の北岸に聳ゆる大峭壁は堂々たるものであつて碁石岩及燒ヶ尖と呼ぶのである、碁石岩は其麓に堆積する圓礫あるより此名があり、燒ヶ尖は昔山火事に罹りたることのある名であらう、碁石岩の對岸即ち南岸に聳つ岩柱を梯子岩と呼ぶ、此附近より下流には多數の奔湍や瀑かあるから此所を千瀑洞口と呼ぶのである、夫れより梅橋や櫻橋などの呼ぶ吊橋を經て川の殆ど直角に屈曲する所榧ヶ淵と云ふ、此附近峽谷の展望廣く屈指の名所である、榧ヶ淵の西岸即ち探勝者の頭上に屏風の如き大岩壁連亘し其一角を破つて落つる水を櫻の瀧と呼ぶのである、次は舟入及舟淵であつて紺碧を湛へたる深潭の東側にある絶壁より巨岩深潭に突出し頂上平坦で十數株の松樹茂り規模大ならざれども愛すべき風景であつて巨岩と絶壁との間に少さき入江を作りて舟あらば繫ぐに好箇の場所なれば舟入と呼ぶのである、舟淵の下流

少許對岸に當り延長一〇〇米許の階段狀浸蝕を受けたる所がある其形の似たるより之を雛壇と呼んで居る、路傍に一つの小穴があつて夏期盛に冷風を吐き出す風穴は夏期探勝者を慰むる所である、大谷淵は長き碧潭であつて四隣の風光と相俟つて甚だ幽邃である、此淵は對岸に雜木林の鬱蒼たる大谷山と同名の谿流があるが故に此名があるのである、大谷淵に續て獺淵がある、その棲息する所なれば此名ありと云ふも果して獺なりや否や未だ正體を明かにしない、次は鈴ヶ茶屋であつて此所は篠生村と川上村との境界を爲す溪流の阿武川幹流に合流する所で鈴ヶ茶屋と呼ぶ茶店あるが故に此名がある所以である、廣滑と呼ぶ所は川床の幅著しく擴大し奇岩重疊し水は深く岩を嚙み川幅僅に六―七米となる此所を橋架けと呼び東側に聳つ絶壁を坊主岩といふ、橋架けを北に距る數十歩の所で巨岩突出して通路を閉塞するを開鑿して小洞門を造り之を高島洞と名づく、洞の東側崖下は佳景淵と呼ぶ大甌穴である、此淵より下流は川床暫く傾斜を加へ到所に大小の奇岩出沒して奔流は岩に激しては霧となり虹となり囂々たる響を作つて流るゝ、之を上和留瀨及下和留瀨といふ、此瀨は昔、杣夫が薪材を流下せし

むるに最も困難せし所である、其東岸には略々三角形の大絶壁聳ち岩面にイハヒバ、セツコクなどの岩生植物を見る、和留瀬の岩を嚙んで流れ來る奔湍は鏡の如き欅淵に靜止す、是より路は坦々として樹叢の間を縫ひ岩固屋、猪渡りがある、岩固屋は昔時牠夫の利用せしもの、猪渡りは猪の彼岸と往復せし流れ緩かなる所である、紅葉橋は生雲溪の入口であつて橋下の瀑を第一斷魚瀑と云ふのである、

吊橋に近き峭壁を開鑿する洞門を北海洞と名づけ其麓の深潭を井淵と云ふ、澪無しは井淵より流れ出でたる水を湛へたる淵で川床に横はる岩盤を鴛鴦岩と云ふ、蓋し嚴冬の候鴛鴦の來つて憩ふが故ならん、流れ北に轉ずるや川床忽ち急傾斜を爲し此所に第二斷魚瀑を作り第三斷魚瀑となつて龍宮淵に渦卷き落つ、

龍宮淵は大なる深潭で神龜岩水面に頭角を表はす、此淵は峽中の名所で旱天の際里の農夫來つて請雨する所である、淵には巨大なる鯉あり鮎あり又た稀には鱒の居ることもありて投餌に集まり來ることは一興である、此淵の少しく下流より萩まで自動車一時間餘りにて到達し得らるゝ

長門峽驛より龍宮淵の下までの距離五粁である。

中長門峽

中長門峽とは龍宮淵の少しく下流より栃崎口に至る大約三粁の間であつて、上長門峽と下長門峽との間に介在する名勝指定地より除外せられたる地域である

此地域内は阿武川幹流に沿ふて南北に道路が完成し乘合自動車の便があつて萩又は小郡に容易に出ることが出來る

龍宮淵より湯の瀨に至る二粁の間は川床の傾斜緩かとなり兩岸の山々は屏風の如く南北に連り雜木茂りて秋期は紅葉の名所として知られ、初夏の候には銀鈴を振るが如き河鹿の清音は有名である、又た春期はツツジ、川の兩岸を飾りて實に美觀である

此所に又の瀨と呼ぶ所があつて川の小島の爲に川水は二岐して流れ雜木覆ひ茂り靜かなる景色がある、又た舞淵とて流れ來る木葉が水面を規則正しく旋回する淵や大淵など呼ぶ所もある

湯の瀬は阿武川幹流の西岸にあつて此所に万碧樓と呼ぶ旅館のある所である、此地の山麓の岩窟中よりも川床よりも盛んに温湯を湧出する、湯の瀬なる地名は湧出する温湯から出たものである、此鑛泉浴場は昔、萩の海潮寺住職が阿武川の川床より温湯の湧出する所あるを聞て此地に來て住み浴場を開きたるものである、此鑛泉は甚だ遺憾とすることは温度の低いことであつて入浴せんとせば加温を要するのである

此地は夏期に於ては潑溂たる鮎、石斑魚、鯉、鰻等の産地で有名であり且つ長門峽遊覽者の食膳を大に賑はすのである

湯の瀬より西方に向へば長門峽名勝地域の一部なる漣溪に入ることが出來るが案内人を要する、又た東方に向ひ少さき坂を登り生雲村に入ることが出來るが何れも徒歩を要する

此地より川岸を沿ふて下れば對岸に柝崎口を望みて下長門峽の北極なる牛の首となる、牛の首とは川岸に横はる一大巨岩であつて其形狀の似たるより此名があるとのことである。

下長門峽

下長門峽とは柝崎口の北端より下流約三粁許の間であつて長門峽中第一位の偉觀を備ふる地域である、柝崎口より下流は對岸に大天狗岩及小天狗岩、頭上に鳥帽子岩及獅子岩等がある、其西少許に金郷出合の堰堤があつて靜かに水を湛へ深潭を造る、此所は藏目喜川と阿武川幹流との合流點であつて藏目喜川を遡れば金郷溪に入ることが出來る、金郷出合には元架橋せしこともあつたが洪水の際に流失せし以來今は繰舟にて彼岸と交通する、此附近の山腹に發昌寺と云ふ寺を今ま建造中である、長門峽唯一の奇勝と呼ばるゝ切籠は川床より直立一五〇米の堂々たる岩柱であつて頂上は水平に切棄てたるが如き整然たる形態で切籠燈籠の形に似てゐるので此名ありとのことであつて本峽第一の偉觀である、切籠の風景は東方より又は南方より仰ぎ見るを最も勝景とする、切籠の兄弟とも云ふべき大岩柱なる切窓は切籠岩柱に相隣りて雲表に聳へ屈指の壯觀である、此

岩柱の中腹部の一部に大なる空洞があつて恰も窓の如き有様であるから切窓と呼ぶのである、川床には大小無數の岩石が重疊するも水電の爲に水枯渇せるは遺憾である、川岸に岩固屋と呼ぶ屋根形の巨岩があつて昔、杣夫の利用した所である、是より下流少許の所に通路の前面を遮りて巨岩高く頭上に聳ゆる、仰げば頂上平坦で其形態頗る奇である、之を十兵衞岩と呼ぶのは昔十兵衞なる者巨岩に攀上りて岩生植物を取らんとして墜落死亡せしより此名を得たるものである、川を距てゝ對岸に巨岩屹立し頂上に松樹繁茂する奇岩があつて鷲岩と呼ぶのは昔、鷲の巣を搆へたることあるより此名ありとのことである、重屏岩と鷲岩とは往時接續せる一大岩壁であつたが流水の浸蝕に依り今は川の兩岸に相對峙するに至つたものである、此所の川床に大なる碧潭があつて形の似たるより鍋淵と呼ぶ、此淵に接して畦の瀨がある、是は川岸に於ける雛壇の如き階段を呼ぶのであつて水平の石理に沿ふて浸蝕を受けたる岩石は恰も山間傾斜地に於ける田地の畦が重なり見ゆる狀態に彷彿たるより此名を得たるものである、下長門峽指定地は此地を以て終點とする。

生雲溪

阿武川の支流なる生雲川は阿武郡中央部の水を集め長門峽龍宮淵の少しく上流にて阿武川幹流に合する、此川の下流は急傾斜を爲し深き峽谷、飛瀑、深潭等の奇勝を作り實に淋しき光景である、此溪谷を生雲溪と云ふのである

本溪の奇勝區域は延長一粁許の間にして長門峽驛より本溪の終點迄五粁である、本溪の入口なる紅葉橋は長さ七〇米の木造吊橋であつて、川の北岸には突兀たる峭壁聳へ其麓を流るゝ阿武川幹流は川道北轉して川床には奇岩出沒し奔湍雪の如き有様である之を第一斷魚瀑と呼んで居る、橋の上流は水靜にして兩岸の森林鬱蒼たる有様で此附近は秋期紅葉の名所である、本溪中に杣淵瀑、暗がり淵、飛渡瀑の三ヶ所は有名である

紅葉橋の東方二五〇米の所に杣淵瀑がある高さ三〇米、幅二米であつて宛ら白布を掛けたるが如き有様である、其瀧壺を杣淵と呼び甚だ深き瀧壺であつて水は

濃藍色を呈し四周は雜木鬱蒼として枝を交へて凄然たる光景である

次は暗がり淵であるが此淵は往時生雲川の水路を横斷したる岩壁が水を堰止め淵を作れるも其水は漸次岩壁の弱點を浸蝕し水の出口を求めたるものであつて今は川の中央即ち川心に關門の如く水門の如く兩岸より絶壁相逼りて幅僅に二米餘の水路を造りしものである、川幅四〇米の溪谷が中央部に於て僅に幅二米餘の水路を有するに過ぎざるものであるから流れ來る水は岩盤を縱ままに浸蝕し此所に深き淵を作れるものである、其水門の如き岩壁は左右共同大で高さ一二米許である、斯の如き有樣なれば淵の附近は白晝甚だ暗きを覺ゆるより暗がり淵の名がある所以である、出水の際水門より吐出す水は左右岩壁の麓に渦卷き流るゝ有樣は壯觀實に極まり無いとのことである、水門の間より上流を望めば數十米を距てて一つの飛瀑を見る、是が飛渡瀑である

飛渡瀑は本溪の終點であつて瀑は高き岩壁の間に懸り高さ二〇米幅六米許である、水は岩角に觸れて碎け深潭に落つ

長門峽遊覽者は必ず本峽を見逃してはならぬ。

金郷溪

阿武川の支流なる藏目喜川は阿武郡吉部村に發源し生雲村藏目喜を過ぎ金郷出合に於て本流に合する、この流域には櫻郷鑛山、藏目喜鑛山等古來稼行せる有名なる鑛山の所在地であるから金郷溪の名を得たる所以である、特に櫻郷鑛山は千餘年前の發見であつて爾來興廢幾多の變遷を重ねたるものである、藏目喜川が幹流に合する地點なる金郷出合より上流一粁の間を金郷溪と呼ぶのである、出合は縣電阿武川堰堤のある所であつて、西には切籠の大岩柱巍々として聳へ其最も威容を備へたる風光は此地點より仰ぎ見るを最も佳景とする

本溪の兩岸は總て鬱蒼たる雜木林であつて春夏の候は新緑滴るが如く、秋期に至ては滿目の紅葉、錦を綴り峽中隨一の美觀である、冬期は樹林悉く枝梢を裸にし稜々たる山骨を表はして物淋き光景を呈する、本溪は甚だ人烟に遠ざかり往々群猿を見ることもありて秋期林間の熟柿を求めて樹梢を轉々飛渡るを見るも

峡中の一興である

本溪の主要なる奇觀は金松岩の絶壁と猿渡瀑の二である

金郷出合より川の東岸を沿ふて遡ること五〇〇米許にして小洞門を過ぎ金郷門と呼ぶ岩頭を越ゆれば川を距てゝ左方に恰も板を垂直に立てたるが如き巨岩があつて東面し峭立すること一〇〇米を越ゆ、其岩頂には倭松枝を交へて岩頭を飾り甚だ偉觀である、是が金松岩と呼ばるゝ絶壁である

金松岩を見て道を右方に向つて轉ずること少許にして金郷溪の終點たる猿渡瀑に達する、此瀑は猿飛瀑とも呼ぶ、以前此附近は猿群を見ること多かりしより此名がある所以である、此瀑は數條の小瀑であつて川床に横はる巨岩の所々より落つるものである、是は水が岩石の節理又は軟弱なる部分を浸蝕するが故に飛瀑となり一直線に落つるもの、扇の如く擴がれるもの、屈折して落つるもの等、夫々形態を異にするが故に甚だ趣味ある勝景となるのである、長門峡内には多數の瀑はあれども到底此瀑に比すべきものは無い、特に増水の際には壯觀實に極まりなしと云ふことである、此附近は河鹿の名所である。

漣　溪

漣溪は阿武川の支流なる佐々並川の一部を爲す石英斑岩の浸蝕谷で長門峡中屈指の奇觀である、川の兩岸には奇岩聳立し川床には到所に大甌穴及深潭連續し奔湍及飛瀑相續き山林には雜木鬱蒼として繁茂し附近には人家も無く實に凄然たる光景である、本溪探勝の道は未だ出來て居ないが其附近までは徒歩にて辛ふじて通り得らるゝ小徑がある

山口方面より本溪に入らんとする者は山口市より省營自動車にて佐々並に下車し川上村長者原にて案内人を傭ふを必要とする、佐々並より長者原まで八粁、夫より本溪迄二粁强である

萩方面より本溪に入らんとする者は自動車にて川上村藤藏に下車し夫より佐々並川の左岸を遡るを可とするも本溪に近づけば通路無き所もあることを覺悟せねばならぬ、又た川の増水時には交通不能となる、藤藏と本溪の間一二粁强で

ある

又た萩より野戸呂附近まで自動車にて行き夫より徒歩にて本溪に入るが最も便利ならんか

其他所々に通路あるも上長門峽より鈴ヶ茶屋又は龍宮附近より野戸呂に出で夫より本峽に入るも可ならん、鈴ヶ茶屋、漣溪間約八粁であるが相當の難路である

漣溪は上魚切、下魚切の二部より成り全延長は一粁許であつて古來人の訪ふもの極めて稀で漁人、獵夫、杣人の通過することあるに過ぎざれば定まれる通路なければ探勝者は溪の北緣に沿ひて進まねばならぬ、又た屢々大なる岩盤を越へ時には岩角を攀づるが如き難所も少くはない

上魚切は川床に奇岩或は立ち或は伏し奔湍之に激して白雪と化し深潭に靜止しては紺碧となる、斯の如き光景を連續繰返すこと幾十回、斯くて流向一轉して見るも凄然たる大碧潭なる畦ノ淵となり是より下流は下魚切となる

下魚切は漣溪中隨一の名所にして湯桶の口と呼ぶ飛瀑と大鍋小鍋より隅淵を含む一帶の奇勝地の總稱である、此附近は兩岸恰も切立てたるが如き岩壁、岩柱連續して頗る物凄き光景を呈する

湯桶の口とは湯桶の水の迸出するが如き飛瀑なるが故に此名ありしも遡河魚の爲に岩角を打碎きたれば水勢今は變はりて往時の光景を見るを得ざるを甚だ遺憾とする、湯桶の口の水は岐れて二條となり一は大鍋に他は小鍋に落つ、大鍋小鍋は何れも完全なる眞圓の大甌穴であつて大鍋は川床の中央に位して徑一〇米、其水極めて深く濃藍色を呈する、小鍋は川の南岸に聳てる岩壁と大鍋との間にありて其口徑七米、岩盤に規則正しき圓筒狀の浸蝕を爲し碧潭を作つて水は溢れて大鍋に流込む、其狀態實に奇にして漣溪の價値はこの部分に存する

大鍋小鍋の水は更らに連續する大小十數個の深き甌穴に順次に落ちて隅淵と呼ぶ濃藍色を呈する大なる深潭に流込む、淵には多數の鮎、鱒、鯉、石斑魚等の廻游するを見ることがある、春期には仔鮎の大群は甌穴に充ちて增水を待ち遡河せんとすることがある、夏期には瀧の兩側に聳てる岩壁に沿ふて仔鰻續々岩壁を匍ひ登り競ふて上流に向つて魚貫するを見るも一興である。

昭和十三年三月三十日印刷
昭和十三年六月三十日發行
（非賣品）
發行所　山口縣
印刷所　山口縣廳印刷所

752
99

752
99

N75